

目次

凡例	ii
地図	iii
ベトナム全土	
ランソン省	
ヴァンラン県	
タンラン社	
写真	vii

序論

第1節	本書の目的	2
第2節	本書の構成	7
第3節	ベトナム少数民族政策の概観	10
第1項	前近代王朝の周辺諸民族との関わり	10
第2項	インドシナ共産党成立後の少数民族政策	12
第3項	冷戦期の少数民族政策	13
第4項	1990年代以降の少数民族政策	14
第4節	タイ族・ヌン族概況	15
第5節	研究の方法——フィールド調査の位置づけ	17
第6節	調査地（ランソン省ヴァンラン県タンラン社）の概要と位置づけ	20
第7節	研究史	22
第1項	タイ族・ヌン族に関する民族学及び歴史学研究	22
第2項	壮族研究	25
第3項	ベトナム少数民族政策史研究	30
序論 注		32

第I部

王朝・植民地支配期の “トー”・“ヌン”

第1章	ベトナム王朝とフランス植民地支配	43
第1節	阮朝以前——ランソン省の土司とその起源	43
第2節	阮朝——土司制度から流官制度へ	45

- 第1項 阮朝の少数民族政策／45
 第2項 阮朝期のトアットラン州（ヴァンラン県）の土司／47
 第3節 フランス植民地支配 48
 第1項 植民地統治と土司制度の衰退／48
 第2項 フランス植民地支配期のトアットラン州（ヴァンラン県）／50

第2章 タンラン社入植の歴史と“トー”・“ヌン”の成立…………… 54

- 第1節 各一族の入植と家譜 54
 第2節 地簿 58
 第1項 地簿の概略／58
 第2項 社の境界／60
 第3項 土地所有状況／61
 第3節 現在の集落別居住状況 62
 第4節 葬儀助け合い組織フェ 65
 第1項 フェの仕事／65
 第2項 フェの組織原理／67
 第5節 社の俗例（郷約） 69
 第6節 “トー”と“ヌン”の相違 71
 第I部 注 76

第II部

革命運動とタイー族・ヌン族の 貢献

第3章 抗仏期…………… 91

- 第1節 革命世代の変遷 91
 第1項 第1世代 ホアン・ヴァン・トゥとルオン・ヴァン・チ／91
 第2項 第2世代 ホアン・ヴァン・キエウ／96
 第2節 タンラン社でのベトミン運動 100
 第1項 日本軍の北部仏印「進駐」と村人の秘密活動／100
 第2項 革命政権の樹立／102
 第3項 ナーサム解放とベトミン運動の発展／103
 第4項 フランスの復帰とホイホアン社への避難／105

- 第3節 村人の抗仏戦争への貢献 106
 第1項 タンラン社での抵抗／106
 第2項 辺境戦役／107
 第3項 村人の活躍／108

第4章 抗米期 114

- 第1節 タイ一族の活躍——自治区の指導者として 114
 第1項 越北自治区／114
 第2項 他の自治区／117
 第2節 村人の抗米戦争への貢献 119
 第II部 注 125

第III部

土地政策と土地所有

第5章 合作社の設立と解体 136

- 第1節 八月革命期の土地分配 136
 第2節 民主共和国期の土地改革 137
 第1項 「民主改革」／137
 第2項 互助組の成立／137
 第3節 合作社化の進展 138
 第4節 合作社解体と「小作人」の再出現 140
 第1項 土地取り戻しと合作社解体／140
 第2項 土地争いの発生／141
 第3項 土地なし農民と小作人の再出現／144
 第4項 「先祖の土地取り戻し」の背景——伝統的な土地所有／145

第6章 自由移住の出現 147

- 第1節 国家の人口再配置計画 147
 第2節 自由移住の出現 148
 第3節 移住の具体例 150
 第4節 自由移住の原因 152
 第1項 プッシュ要因／153
 第2項 プル要因／155
 第5節 移住先での摩擦と自由移住対策 157

第6節	自由移住の阻止	159
第7節	中部高原における少数民族暴動	160
第8節	自由移住の意味	161
第Ⅲ部	注	164

第Ⅳ部

教育の変遷

第7章 「ベトナム国民化」教育…………… 174

第1節	漢字・漢文教育	174
第2節	フランスによる学校教育の導入	175
第3節	教育の進展	178
	第1項	バトミンによる学校設立とベトナム語識字運動／178
	第2項	学校教育の発展と識字率・就学率の向上／179
	第3項	地元出身教員の成長／181
第4節	教育レベルの低下	182
	第1項	キン族教員の派遣廃止／182
	第2項	国境貿易の影響／185
第5節	政治局22号決議の成果と限界	187
	第1項	政治局22号決議／187
	第2項	22号決議の限界／188
第6節	村の秀才 — ペー・ヴィエット・ダーンの場合	191

xxxix

第8章 少数民族語(タイー・ヌン語)政策 …… 195

第1節	少数民族語政策の理念	195
第2節	タイー・ヌン語前史	196
第3節	タイー・ヌン語の正書法認定	197
第4節	タイー・ヌン語教育	199
第5節	タイー・ヌン語標準化	200
第6節	タイー・ヌン語普及政策の結果	201
第7節	タイー・ヌン語普及政策失敗の理由	202
第8節	「タイー・ヌン語」が創り出そうとしたもの	205
第9節	最近のタイー・ヌン語をめぐる動き	207
第Ⅳ部	注	208

中国との関係

第9章 友好期 222

- 第1節 日本軍侵略下での壮族の避難——未完の「国民」意識 222
- 第2節 人民解放軍を援助したバトミン——「国民」意識形成途上で 223
- 第1項 越・中の協力関係／223
- 第2項 タイー族にとっての「紅軍援助」／225

第10章 関係悪化期——「国民」意識の下で 227

- 第1節 文化大革命下での壮族の避難 227
- 第2節 越北自治区廃止 230
- 第1項 廃止の理由／230
- 第2項 チュー・ヴァン・タンの失脚／232
- 第3節 華僑・華人「帰国」問題と中越戦争 234
- 第1項 華僑・華人「帰国」問題／234
- 第2項 中越戦争の勃発／237
- 第3項 タンラン社住民の避難／238
- 第4項 ヌン族への警戒心／240
- 第5項 戦争の後遺症／242

第11章 関係回復期 243

- 第1節 中越戦争後の相互往来 243
- 第1項 親戚づきあい／243
- 第2項 国境貿易の再開／244
- 第3項 定期市／247
- 第2節 婚姻状況の変化 249
- 第1項 国境を挟んだ婚姻の増加／249
- 第2項 村内の婚姻状況—新しいヌン族の登場／250
- 第V部 注 254

結 論

- 第1節 まとめ 262
- 第1項 各部の概要／262

第2項 国家の「民族」概念と草の根の民族意識	272
①フランス植民地支配期（19世紀末～）	273
②ベトナム人共産主義者進出期（1940年代半ば～）	274
③解放後～民主共和国期（1950年代～1975年）	275
④南部解放後～ドイモイ前（1975年～1989年）	276
⑤ドイモイ後～現在（1989年～）	277
第2節 本書の限界と今後の課題	280
結論 注	282

附論

中部高原のタイ族・ヌン族

— 1954年移住組

第1節 南へ渡ったタイ族・ヌン族	286
第2節 ベトナム共和国下の暮らし	287
第3節 南北統一後の暮らし	289
第4節 ドイモイ後の暮らし	291
第5節 まとめ	292
附論 注	294

参考文献	300
あとがき	315
索引	319